
披荊斬棘 - ヒケイザンキョク -

夕日 朝子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

披荆斬棘 - ヒケイザンキョク -

【Nコード】

N3252W

【作者名】

夕日 朝子

【あらすじ】

死神代行を辞めた後普通の人生を送り、天寿を全うした黒崎一護。一方尸魂界は一護が来た後もその霊圧は全く感知されず、尸魂界に來ていることすら認知されていなかった。一護が来たと知った死神達は、霊圧が感知できないことに嫌な予感を感じ取り、一護の探索を始める。そして発見された一護は―――― 初投稿・鈍足更新ですが、よろしく願います。

prologue (前書き)

はじめまして！夕日朝子と申します！

初投稿なので色々手探り状態です…

拙い文ですが、お付き合いよろしくお願いします。

prologue

——約束は、果たされる為に、在る。

本来ならば、出会うはずのなかった出会い。
それなのに、自分たちと彼の間には、いつの間にか背中を任せるの
に安堵を覚える程の信頼を築いていた。

けれど、元々交わるはずのなかったもの。
違えるのは仕方がないこと。

もう会えることなど無いというのに、
最後に見た彼の者は笑みを浮かべていた。

” お前らに会えて、よかった。
”

”俺が生きている間は、もう二度と――”
”だけど、いつか、――”

元死神代行・黒崎一護

穏やかな春の陽気の中、病院にて家族に囲まれながら、静かにその生を終えた。

一諾千金

（”いつか、きっと”）
（”必ず、また、会える”）

prologue (後書き)

一諾千金・イチダクセンキン・

信頼できる承諾。また、約束を重んじなければならないこと。

+++++

ここまで読んでいただきありがとうございました！

誤字脱字があれば、ご報告していただけるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます。

予感（前書き）

尸魂界 side。

ルキアメインになるかと思われます。

予感

—— 今思えば、あの時すぐにでも駆けつけるべきだったのだ。

+++++

初めにそれを感じたのは、ルキアだった。

久々の丸1日の非番。

にもかかわらず誰とも都合が合わなかった為、ルキアは朝早くから毎日限定20皿の餡蜜を食すべく値段も安く味も極上と評判の甘味処へ1人向かっていた。

（やはりうまい！早起きしてでも来たかいがある！！）

目当ての甘味をぺろりと平らげ、1人ご満悦なルキアはスキップで
もしそうな足取りで店を出た。

（特に急ぎの用も無いな…よし。少しぶらつくか。）

1日を通して幾つもの店を廻り、そろそろ帰るかと思った頃。

「……………ん？」

感じるのは、どこか、懐かしい気配。
包み込むような、温かみのある霊圧。

（一、護…？）

人間でありながら死神の力を持ち、幾度となく尸魂界を救った。

そして何よりも、自分の命の恩人である彼。

自分がその気配を違えるはずは、無い。

一瞬だけ感じた気配をもう一度と探ってみるものの、その霊圧を掴むことはできなかった。

（気のせい、か…）

どこか寂しく感じるが、その霊力の大きさ故に抑えることを苦手とし、周りからはただ漏れと評されていたことを思いだして、クスリと微笑む。

（別れてからもう大分経つな… まあ奴の霊^{レイ}圧^{アツ}ならば尸^し魂^{たま}界^{かい}に來れば私でなくとも直ぐ分かるか。）

微かに感じた気がした流魂街の方に目を向けて鮮やかに染まる夕焼けに目を細めながら、ルキアは自宅へと足を向けた。

彼のことを思いだしていた為か、今の空の色と同じ色を持つ彼と過ぎた遠い日々へと再び思いを馳せる。

（今日は、久しぶりにあ奴のことを兄様と話してみよう。）

そう思いながら、ルキアはゆっくりと歩を進めた。

それから約1ヶ月後の昼、ルキアは六番隊の隊長室にいた。

外での任務が無い限りいつもの業務の中、ルキアと恋次と白哉は週に何度か六番隊にて昼食にルキアの作った弁当を食す。そこで他愛のない話をするのが常だった。

時々3人以外が混じったりするのだが、今回は久々に現世からやって来ていた夜一がルキアが弁当を持ってきた際に丁度六番隊にいたため、この4人で昼食をとることになった。

「しばらくの内にまた腕を上げたのう。これならいつでも嫁げるのではないか。のう？白哉坊？」

くつくつと笑いながら夜一はルキアの弁当を絶賛する。その横で白哉は眉間に皺を寄せながら黙々と食している。

2人にとってこのやり取りも既に手慣れたものなのだろう。対してルキアは未だに慣れないのか頬を赤く染めていた。

「夜一殿の口に合って何よりです。……っ!？」

夜一に何とかそれだけ返したかと思うと、ルキアは急に窓へと目を向けた。

いきなりのことで3人は目を見張る。

「…どうした？ルキア？」

恋次が問うとルキアは焦ったように返した。

「…感じませんでしたか…？」

「？何がだ？」

それから少し目を閉じて何かを探るような気配を見せた後、漸くルキアはこちらへと視線を戻した。

3人は一体何事かと疑問を浮かべている。

「今…一護の霊圧を感じた気がして…」

「…?!?」「」

唐突に懐かしい名を聞いた3人は息を呑んだが、すぐさま霊圧を探り出した。

「…感じぬな。」

「…ああ。」

「…そうっスね。」

目を閉じうんうん唸っている3人を見て、申し訳なさそうにルキアは口を開いた。

「すみませぬ…突然……実は、ひと月程前にも感じた気がしたもので…」

その言葉に白哉は目を開く。

「…それは真か？」

「はい…と言つても、今回のように一瞬だけでしたが…」

「でもそれじゃあ妙じゃないっスか？一護の奴が尸魂界こっちに来てんならすぐさま瀟霊廷に来るだろうし…万が一來れないとしても、わざわざ霊圧を抑え込む必要なんて無いでしょう？」

その言葉に再び考え込む。

ルキアは慌てて、

「あの、感じた気がただけですので…！」

「だがそれが二度となると少し気になるの。それにあ奴の齡を考えるともうそろそろ尸魂界に来てても可笑しくはないはずじゃ。…うむ。少し現世で調べてみるかの。」

「夜一殿…」

申し訳なさそうな顔をしたルキアの頭をくしゃりと撫でて、夜一は再び口を開いた。

「なに、わしが好きで調べるだけじゃ。お主が気負う必要などあり

はせぬ。…それに今日は久々に美味しい飯を食わせてもらったしの。その礼じゃ。」

「ありがとうございます…」

その様子にふふと笑い、夜一は席を立った。結局夜一も、懐かしい彼が現在どのようになっているのか気になるのだ。

「では何か分かったら連絡を入れようかの。もしかしたらこちらに來ているかもしれん。主らも一護の靈圧を度々探ってみるようになしてくれ。」

「ああ。」

それだけ言葉を交わすと、夜一はすぐに出て行ってしまった。

残された3人は弁当を片付けた後に午後の業務を行うべく、各々準備に取りかかった。

予感（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます！

誤字脱字など気になる点があれば、ご報告してもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

察知（前書き）

ううむ…難産でした。

ここから先も、文に起こすにはちょっと難しいですね（汗）

主人公登場までが遠い…！（泣）

察知

――――離れなければ。

ただそれだけが頭をよぎる。

目の前で起きたことは信じられないものだったけれど、腕の痛みと自分を濡らす赤がそれは事実だったと証明していて。

震える体躯を何度も叱咤し、気を抜けば止まりそうになる足をなんとか持ち上げ、唯一の持ち物であるここへ来た時気づけば既に己の手の内にあつた身の丈程もある刀を鞘ごと抱え、とりあえずはと人氣の無い所へと必死に駆け抜けた。

その者が離れた後に残っていたのは、割れてしまった仮面のような欠片。

そして、
辺り一面の血の海だけだった。

+ + + + + + + + + + +

夜一が現世で調べると言ってから、既に1ヶ月程が経過した。
その間、ルキア・恋次・白哉は時間がある都度幾度となく霊圧を探
ったが、結局のところ、感知したのは一度たりとも無かった。

矢張り気のせいかな…とルキアが思い始めた頃。
その日の業務が終わり報告を終えて隊舎内を歩いていると、後ろか
ら馴染みのある声がかかった。

「ルキア！」

「恋次か…どうしたのだ？そんなに急いで。」

「今、平気か！？」

「ああ。…何かあったのか？」

「夜一さんが現世から来たんだ！すぐ来てくれ！」

その言葉に息を呑むと、すぐさま恋次の後に続いた。

「隊長！ルキア、連れて来ました！」

「失礼します。…何か、あったのですか？」

2人が六番隊隊長室に足を踏み入れると、険しい顔をした夜一と白哉がいた。

それを見たルキアの鼓動が早まる。手の平には嫌な汗が滲んだ。

「分かっているとは思うが、一護の件じゃ。あ奴…もう3ヶ月も前に天寿を全うしておる。…最期は家族に囲まれて逝つたらしい。」

「…ってことは一護の奴、もうこっちに來てるってことツスカ？」

「そうなるの。あ奴程の実力者に限って、もしもなんてことはあるはずが無い。…現世でも調べられるだけ調べたが、霊圧の名残が最期にいた病院にあっただけじゃ。力を失ったなどとは考えられぬ。既に尸魂界にいると見て間違い無いじゃろう。」

「…すると今現在、霊圧の出せない何らかの状況にある…ということだな。」

「そう…なりますね。」

かつては隠密機動としても名を馳せた夜一が1ヶ月もかけて調べきたものだ。間違いないだろう。

だが一護がこちらに来ているとはいうものの、現在も尚彼の霊圧を一切感じられない以上、彼を迎える手がかりなど何も無かった。

「ふむ。その反応からすると、この1ヶ月一護の霊圧は全く無かったのじゃな。」

「はい…私らも事あるごとに探ってみました…」

「俺も任務で流魂街に行く足で何度か探してみましたけれど…
…っ！！？」

一瞬、大気が、震えた。

「……………間違いない。一護の霊圧だ。」

「今…！」

「…4人とも感じたようだな。」

「けど何処からかは…！」

「…儂が出る。3人はすぐに山本に伝える。」

それだけ言った夜一は姿を消した。
残った3人は山本に報告すべく、すぐさま隊長室を出た。

「ふむ…確かに妙じゃな。」

夜一が出てから3人はすぐに一番隊に赴くと、始めにルキアが一護の霊圧を感じたこと、それが妙だと思い夜一が現世で調べると一護は既に3ヶ月も前にこちらに来ているはずであること、そして先程4人が一瞬ではあるが同時に一護の霊圧を感じたことを報告した。それらを聞き終えろと山本は顔をしかめて黙り込む。横にいる雀部は心配そうな表情をしている。
少ししてから山本は重い口を開いた。

「黒崎一護程の霊圧の持ち主が3ヶ月もの間、霊圧探查機にかからない。…となると霊力の出せない何らかの状況に置かれた、ということになるか…して、こちらに来ていたというのは間違いなかな。」

「はい。夜一殿が現世で調査し、確認されました。その際最後にいた病院に霊力の名残があったとのことで、その時点で霊力を失ったということは無いと思われます。」

ルキアが焦った口調で答える。

それは仕方ないことだろう。尸魂界にいる者の中で、ルキアが誰よりも一護と共にいたのだ。その絆は深く、それ故なのか最初に一護の霊圧を感じ取ったのはルキアなのだから。

山本はその言葉に再び思案を巡らす。

「…只の一魂魄の為ならば、我々護廷が動く訳にはいかぬ。」

山本の、総隊長としての重くのしかかる言葉に3人の顔が強張る。

「しかし護廷だけでなく、尸魂界は黒崎一護により幾度となく救われた。…その者が現在困難な状況に置かれているとなれば、我々が助けぬわけにはいくまい。」

「それでは…！」

「うむ。探索班を結成する。十二番隊にも黒崎一護の霊圧を重点的に霊圧探查をかけさせるかの。」

「ありがとうございます…！」

「良い。それでは探索班は朽木白哉・朽木ルキア・阿散井恋次、主ら3人を中心とし進めるものとする。目的は元死神代行黒崎一護の魂魄の探索及び保護。…仮に霊力の消失などが起きていたとしても、保護対象を瀨霊廷に入れることを許可する。だが現在どのような状況にあるか分からぬ以上、発見後は保護を優先的に行い、そして黒崎一護本人の意志を尊重せよ。」

「『は。』」

「ではこの事を他の隊にも伝えねばならないの。…雀部、緊急隊首会を開く手筈を。」

「畏まりました。」

「……………彼との時間が、再び動き始める。」

察知（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！

誤字脱字など気になる点がありましたら、報告をもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

探索（前書き）

約1週間ぶりですね！お待たせしました！！

感想ありがとうございます！すごく励みになります！！（感涙）
しかもお気に入り登録されている、だと…？（ごくり）

もう暫くルキアのターンですね。
ではどうぞ！

探索

尸魂界は、広い。

静霊廷ですら数多の死神や貴族がいるというのに、その何倍もある流魂街も含めるとなると探索規模はかなりのものとなるだろう。

——それでも、必ず見つけ出す。

その思いを胸に、ルキアは駆け出した。

探索班は六・十三番隊を軸に構成された。言わずもがな、隊長である白哉・副隊長である恋次・ルキアがいるからである。そして嘗て一護が尸魂界に来た際に技術開発局にて彼の霊圧や斬魄刀のデータを取っていた為、僅かでも彼が霊圧を流せば感知できるよう一部の十二番隊員も組み込まれていた。

開始から3日で少なくとも瀟靈廷にはいないことが分かった。

そのことは予想の範疇だったので、見つからなかったことに若干肩を落としても、それならばと気持ちを切り替え、探索班は数ある流魂街の地区を文字通り1つ1つ調査し始めた。

聞き込みから始め、人気の無い所には実際に足を運ぶ。彼が死神代行を辞めてから結構な年月が経っている為その間に配属された彼を知らない死神も多々いたが、流石にあの髪色を見逃す者はいないだろう。

かなりの速度で、しかし1つ1つをしっかりと念入りに調査しだしてもうすぐで1ヶ月。

漸く半分の地区を調べ終えたというのに、『一護』という名どころか、橙色の髪色を持つ者の話を掴むことは無かった。

2つの隊の殆どを動員するという大規模な搜索となった上にかなりの人員・時間を割いたという努力も虚しく、収穫はゼロに等しかったのだ。

――やっど、半分か。

ルキアは思わず溜め息をつく。

いくら流魂街が広いと雖も半分の調べるのに1ヶ月もかかってしまった。しかもこの半分の終えても、一護に関する手掛かりすら一切見つかっていないのだ。落胆してしまうのも仕方ないことだろう。だがルキアは何故だか分からないが、早く見つけなければ、とどこ

か危機迫るような焦燥感に駆り立てられていた。

兎に角1つ1つを確実にこなすしかないのだ。次こそは、と気持ちを入れ直し各部隊に指示を出す。そうして自身は報告の為、護廷へと足を向けた。

一護が尸魂界^{尸魂界}に来てからは、もう4ヶ月が経つはずだ。

この地区にもいなかったと伝える際、ルキアと同じく落胆の色を浮かべる幼なじみと、表情には出さないが同じ空気を滲ませる兄のことを思うと、その足取りは重かった。

ルキアは一旦自隊に顔を出してから六番隊に向かうと、その入り口に馴染みのある赤を見つけた。どうやらあちらも報告に来たらしい。

「恋次！」

「ルキアか！…そっちの方、どうだ？」

その問いにふるふると首を振ると、そっちもか…と互いに溜め息が零れる。

現在は隊首会の為に白哉は不在だが、あと数刻もすれば戻ってくるだろう。ここ最近は探索の為あまり顔を出していなかったこともあり、（このまま恋次に任せても良かったのだが）ルキアは恋次と共に軽い休息も兼ねて、六番隊隊長室に向かうことにした。

「…そうか。」

戻ってきた白哉に2人が報告すると、白哉はただ一言だけ零して眉を顰めた。

珍しい、とルキアは思う。

普段の兄ならば表情など動かさず、淡々と事務的に事を済ますはずなのに。それを思うと白哉もこの件に関してそれだけ焦りを覚えているということなのだろう。

その考えに行き着くと、ルキアは徐に立ち上がった。

隊長という立場にいる兄よりも自分は比較的外に赴き、この足で探

せるのだ。のんびりしている暇など無い。

「では兄様、私はそろそろ行つて参ります。」

「分かった。…次はどの地区だ？」

「北流魂街となっております。」

「…そうか。」

「気をつけるよ、ルキア。」

「ああ。」

北流魂街は、あの更木など、他と比べてあまり治安の良くない地域も多く含む為に死神と言えども気を引き締めて行かなければならない。

まずは先程指示を出した部隊と合流すべく、ルキアは六番隊隊舎を出た。

「じゃあ俺は一旦開発局に行つて報告出して来ます。」

「ああ。」

ルキアを見送つた後、恋次はそう口を開いた。

いくら探索を任されたといっても、各隊には通常業務があるのだ。

恋次は今日の探索に一区切りがついたところで、ここ数日で溜まっ

た大量の書類と格闘することになっていた。

先程ルキアが持つて来た報告書と共に自身のものも十二番隊に提出し終えた恋次は、ふと隊舎の窓から覗いている空を見上げた。

「一護の野郎…どこで何してんだか。」

暫しの間ぼうと空を見上げていると、不意にまた、大気が震えた。

「つーーーーー!?!」

急いで元来た道へと戻る。そして霊圧探查かけている部署の扉を挨拶も無しに開け放ち、近くにいた隊員に怒鳴りつけた。

「おい!今の霊圧、感知したか!?!」

「は、はい!今解析中です!?!」

これ程早く来るとは予想外だったのであろう若干涙目になりがちな十二番隊員は、恋次の差し迫る気迫に気後れしつつもなんとかその問いに答えた。すると、少し離れた所にある機械の裏から声が拳がった。

「出ました！黒崎一護の霊圧適合率92・8！場所は――北流魂街の70番台の地区です！」

結果を聴き終えるや否や、恋次はこれを知らせるべく、すぐさま六番隊隊舎へと瞬歩した。

――やっと、掴めた。

探索（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！

誤字脱字など気になる点があれば報告をもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

発見（前書き）

10000PV突破…？Σ。 。 ≡（ D ∴ ∴ ）スポーン

ああありがとうございます！！

うわー！うわー！…うーわぁー！！！！

（（（。D ∴ ≡。D ∴ ∴）））

吃驚しすぎて言葉になりません！↑

更新は矢張りスローペースですがこれからも頑張ります！よろしく
お願いします！

では今回は少し長めですが、どうぞ！

発見

「隊長！」

急いで戻ってきた隊長室では、白哉が腰を上げていた。

「恋次か…今、」

「はい！十二番隊の霊圧探知機にもかかりました！場所は北流魂街の70番台の地区だそうです！」

その報告に白哉は息を呑む。

東西南北の各地域ごとに80地区に分かれる流魂街では、地区の番号が大きい程治安が悪い。

それに先程義妹は、北流魂街に行くと言っではいなかったか。

「…ルキアに報告しろ。私は総隊長の所へ行く。——恐らく他隊の隊長共も気づいているだろう。」

「はい！」

「ルキア！」

「恋次！先程、」

「ああ！十二番隊隊舎でも引つかかった！こっちは？」

こちらの方が瀟霊廷よりも位置的には大分近い。居場所の把握ができたのなら自分の情報よりも正確な場所は掴めただろうかと言外に問いてみると、ルキアは軽く項垂れた。

「一応はかかったのだが…探知機にかかった霊圧が一瞬とはいえ強過ぎたみたいでな。…針が振り切れ場所の把握はできなかったのだ。」

「こっちは弱過ぎたみてえだが大体の場所は掴めた。」

「何！本当か！？」

「ああ。…けどな、一旦召集をかけた方がいい。」

「どういうことだ？」

「掴んだ場所がな——北流魂街の70番台なんだよ。」

その報告に近くにいた隊員までもが目を剥く。北流魂街の70番から80番は特に治安が悪いことで有名だ。確かに普通の一般隊員が探索するには危険だろう。

「…そうだな。」

本来ならばすぐにでも探しに行きたいが、この探索の責任者として

はそうもいかない。

ルキアは口惜しい気持ちで召集の指示を出した。

これから召集をかけたところで、隊員が集まった時には既に日は大分傾いてしまっているだろう。いくら死神と言えども、夜中の探索が危険なものに変わりはない。

今日の探索は、きつと、ここまでだ。

やっと掴めた手掛かりなのに、今すぐ駆け出せないのがもどかしかった。

いつもならば思い出を蘇らせてくれる夕焼けの優しい光が、今日は酷く胸に応えた。

時間というものは、時に無情に過ぎ去っていくものだ。

北流魂街の70番から80番地区といえば、”あの”十一番隊の隊長副隊長の出身である『更木』や『草鹿』が含まれている、流魂街で最も治安が悪いと噂されている地域だ。並大抵の隊士では力不足な上、今までのような聞き込みでは殆ど意味を成さない。

だからこそ時間はかかってしまうが、隊士達が地区の隅から隅まで足を運ぶという確実性の高い方法で細かい所まで念入りに調べたというのに。

あの霊圧察知で絞り込まれた範囲よりも少し広めの地域を調べ始めて2週間。まだ一護は見つかっていなかった。

——何故だ。

確かに治安のことから探索に割いた隊士の数は減らせざるをえず2週間前よりも探す速度は遅くなりはしたが、この地域でもうまく立ち回れるような粒揃い達がその目で見て、調べてきたのだ。見落としなぞ無い、はずだ。それでも一護は見当たらない。

「——です。いかが致しましょう？」

探索区域の外れにて、隊士からの報告を聞き終えたルキアは唇を噛む。これで自分が担当する区域は終わってしまった。

拳を強く握り締め、ルキアは暫し思案を巡らせる。

このままここに留まるわけにはいかない。かといって帰還するわけにもいかないだろう。隊士達は次の指示を待っている。

「…そうだな。この地区からの撤退の準備を。その後、あちらの班と合流する。…念の為霊圧探査機はかけておけ。」

「は。」

そう言っ指示を出した後、隊員達に気取られぬよう詰めた息を軽く吐いたルキアは眼下にある流魂街を見下ろした。

もう日は傾こうとしている。

——恋次の方はどうだろうか。

このまま順調にいけば、恐らく今日明日中に終わってしまうだろう。

「——護…一体何処におるのだ。」

ルキアが思わず零したその小さな呟きを耳に入れた者はいなかった。

撤退準備を終えようとしているルキアの隊の間に、一陣の風が吹い

た。

「——っ！？」

1人の隊士——どうやら十二番隊員のような——が突如息を呑む、と思うとすぐさま我に返り所持している霊圧探查機を弄り出した。流魂街を見下ろしているルキアはそれに気づいてはいない。

そろそろ行かなければ、とルキアが振り返ると何やら必死な形相をしている隊士が目に残り首を傾ける。どうしたのだ、と声をかけようとする、その隊士が機械から興奮した面持ちでバツと顔を上げた。

「——かかりました！ここから卯の方角、約一里半です！！」
「！？」

そちらにあるのは——森だ。

ルキアは方角を確かめると、すぐさま指示を出す。

「捜査を再開する！1班は予定通りあちらの探索部隊と合流し、この旨を伝えよ！その後はあちらの指示に従え！残りは私と共に探索

に向かう!！」

「は!」「」

「では——散!」

胸が早まる。

心が急く。

やっと、やっと会えるのだ。

ルキアは力一杯地を蹴った。

「ルキア!」

報告を聞いてルキアの霊圧を辿って来たのだろう。森を疾走するルキアに恋次が合流した。

「探知機にかかったって……！」

「ああ！丁度この辺りのはずだ。今八方に分けて探させている。」

「こっちもそんな感じだ。しっかしまさか森の中なんてなあ。」

そうなのだ。

今いるこの森は、いくつかの地区の狭間に位置する。そしてこの森から少しでも外れればどこかしらの地区に入れるのだ。

それなのにわざわざこんな所に留まるなんて……と頭の隅で考えながらも2人の足は止まらない。

どれ程走っただろうか。

日が暮れ始めて徐々に暗くなりつつある森の中。きよろきよろと視線をさまよわせる2人の視界に、突如色が映った。

はっと息を呑む。あの色は——！

同時に立ち止まった2人は同時に視線を交わした。どうやら互いに見つけたようだ。

1つ頷き視線の先へと駆け出した。

—— やっと、見つけた。

未だに霊圧は一切感じられないが、遠目がちでもはっきりと分かる。木々の間からちらりと覗く人工では真似できないような鮮やかな橙色の髪。—— 間違いない、一護だ。

騒ぐ胸のままに急いで駆け寄る。

目先にいる一護はこちらに気づいていないのか、木にもたれ体を丸めるように座り込み、身の丈程もある刀を抱えたまま微動だにしない。俯いているままなので表情は見えなかった。

やっと、会える。そう思った。

目の前にいるのは確かに一護だ。

彼の持つ特徴的な髪色に大きな刀。己の記憶のものと確かに一致している。

—— だが、これは一体何なのか。

「一、護…？」

ざり、と土が軋む音がやけに大きく聞こえた。

苦しいのか肩で息をしている一護はゆるゆると顔を上げる。
すると、一言。

「——おねえちゃんたち、誰…？」

ルキアと恋次に戦慄が走った。

——黒崎一護は、子供の姿になっていた。

発見（後書き）

長かった…ここまで長かったよ…！
漸く出てきた…！！（とんでもないことになってますが。）

ここまで読んでいただきありがとうございました！
誤字脱字など気になる点があれば報告をもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

保護（前書き）

お久しぶりです！

遅くなってしまつてすみません…！

最近ホントに忙しくて…

なんとか週1ペースでできるかどうかですね。orz

そんな中感想コメントありがとうございます！

感謝感激大号泣です！！

頑張りまっす

ペースアップは難しいけどペースダウンはしたくないなあ。

あ、そういえば章を作ってみました！

タイトルは全部四字熟語で攻めてみる予定です！

意味は…章末ごとに公開します

四字熟語辞典的なもので調べたので間違つてないはず…

読み方も同時に掲載しますね。

だつて…まず『披荆斬棘』も普通では読めないだろうし。。

さてさて漸く出てきた一護！

主人公が5話も出て来ないっていうのも珍しいですよね（笑）
↑
いつソルキアが主人公に起用かな？

ではどうぞ！

保護

「一護、ダメエ…」

思わず零れた恋次の言葉に一護はこてんと首を傾ける。
その仕草は、矢張り幼い。

「おにいちゃん…オレのこと、知ってるの？」

その言葉に再び口を噤んでしまう。
今の一護はルキアと恋次のことを覚えていない。その上言動まで子供のそれになっていることから、何らかの理由で心身共に退行してしまったと考えるのが妥当だろう。

沈黙する2人に不安を覚えたのか、一護は自身の刀を持つ手に力を加えた。

それを見たルキアは慌てて口を開く。

「わ、私達は怪しい者ではないぞ！なあ恋次！」

「あ、ああ。俺達はな、死神っつーのをやってんだ。」

「死、神…？」

「そつだぞ。だからお前を傷つけるつもりは一切無い。…ああ、まだ私のことを言ってなかったな。私の名前は朽木ルキア。こっちの

デカいのが阿散井恋次。」

「オイ。デカいのって何だ。デカいのって。」

「事実であろう。」

どうやら2人の会話を聞いてある程度警戒は解けたようだ。探るような目はしていない。

そのことに安堵しつつもこれ以上不安を与えないようルキアは膝を折り、一護の視線に合わせて話しかける。

「…お前は『一護』で間違いないのかな？」

コクリと頷く。

「ずっとここにおるのか？」

今度はふるふると首を横に振る。

「最初は、街にいたんだけど…危なくて…」

「…そうか。」

矢張り最初はこの周辺の地区に振り分けられたのだ。だがここらは北流魂街の70番台の地区。尸魂界へ来たばかりの幼子1人で生きていくには随分と酷なものだったのだろう。

加えて一護には霊力がある。しかもかなり特大の霊圧だ。霊力のある者は腹が減る。霊圧の無い者と異なり、この過酷な状況下でも何かを食さねば生きてはいけないのだ。

ルキアと恋次は目配せをする。

総隊長は一護の意志を優先させよと言ってはいたが、この状況ではまず保護をすべきだろう。よく見れば一護は所々に怪我をしている。右腕の袖に関して言えば、布の殆どが真っ赤に染まっていた。

「…なあ、一護。今お前は一緒に暮らしている者はおるのか？」
「…いない、けど。………どうして？」
「それならば私達と一緒に来ぬか？…実は私達は訳あってお前を探していたのだ。」

その言葉に目をぱちくりとさせた一護はルキアと恋次を交互に見やる。そして暫し考える素振りを見せた後、何度か口を開閉した。どうやら答えあぐねているようだ。
パクパク何度か繰り返し返した後、漸く言葉を紡ぐ。

「…そこって人、たくさんいる？」

先程一護は街が危ないと言っていた。だからこそこの質問なのだろう。

恐らく今まで街で危険な目に遭ってきたのだ。一護の認識が、人の多くいる所は危ないというものとなっていて仕方がない。

「そりゃあ沢山いるけどよ。皆いい奴ばっかだぜ。…少なくともここよりは安全なんじゃねえか？」

「そうだな。…どうだ？一護、一緒に来ぬか？」

一護に向けて、手を差し出す。

対して一護は、真っ直ぐとこちらを見つめてきた。

「…………おねえちゃんたちが一緒なら、いいよ。」

差し出した手を掴む手は、矢張り小さかった。

けれど握り締めるその体温は、温かいものだった。

一護が体調不良なのは一目瞭然だった。発見した時から肩で息をしているし、所々に怪我也有。
鬼道で軽い応急処置をしてから急いで帰ろうと、今の一護ではできないであろう瞬歩をする為に小さくなってしまった一護を抱え上げる。

その身体は軽く、そして熱かった。

+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+

”一緒に来ぬか？”

その言葉に驚くと同時に喜ぶ自分がいた。

ここに来てから傍にいてくれた人達はもういなくて。

唯一傍にある己の半身は仕方ないことだとはいえ、今は声も聞こえない。

目の前にいる2人を見ると、何故だか分からないが本能的に大丈夫だと思った。

こいつらは、大丈夫。

こいつらは、信じられる。

こいつらは、大切な――

移動する為と抱きかかえられた時、その心地よさにずっとこらえていた涙が不意に出そうになった。
久々に心から安堵したことにも、何故かすんなりと受け入れられた。

そうして無意識の内に張っていた緊張が緩んだせいか、一護の意識は徐々に微睡んでいった。

+ + + + + + + + + + + + + + + +

自分が応急処置をしている間に事後処理をと先に出た恋次が伝令を出してくれたのだらう。護廷に着くや否や、門番はすぐに四番隊へと通らせてくれた。

一護の怪我は酷いものだった。

所々に打ち身や切り傷などの痣があり、特に着物の殆どが赤く染まった右腕は塞がりかけているものの肩から肘下辺りまでパツクリと切れた跡が残っていたのだ。鬼道で粗方塞いだが、早く本格的な治療をするに越したことはないだろう。

途中で疲れていたのか、寝てしまった一護を落とさないよう抱え直し、歩を早める。

治療所に近づくにつれ抑えてはいるが見知った霊圧がいくつか感じられた為、ルキアは更に足を早めた。

奇異と言っべきなのか。

シユールと言っべきなのか。

四番隊に赴いたルキアは真っ先にそんなことを考え、至極真面目に悩んでしまった。

恐らくは恋次が出した伝令の、一護が見つかったことが伝わったのだろう。1ヶ月半にも渡る捜査で漸く見つかった一護がこちらへ来るのだ。

久々に会うことができるという上に怪我もしていると聞いたのならば、業務を切り上げ見舞いに……といったところだろうか。

隊舎内に入ると治療の為と控えていた卯ノ花以外にも、白哉・日番谷・浮竹・京楽の計5人の隊長達が立ち尽くしていた。しかも隊首会以外でここまで隊長達が揃うというのも珍しいというのに、皆同様に口を噤んだまま啞然とした面持ちなのだ。

これを奇妙と言わずして何と言おうか。

そんな鳩が豆鉄砲をくらったような隊長達を見て笑いそうになってしまったのは内緒だ。

そうとは思いつつも仕方ないか、とも感じる。

なにせ今彼らの目の前にいるのは小さくなってしまった一護。そしてその彼を抱いている自分なのだ。身体が小さくなっただけでなく己が抱きかかえているという事実が彼らの現実逃避を許さないのだろう。

恐らく今この場で固まってしまっている全員が必死で脳内処理をしているに違いない。

自分も逆の立場なら、全く同じことをしていたらと思う。

………というか絶対していた。断言できる。

「「「……………」」」

とは言ってもずっとこのままではいられない。抱きかかえて分かったことだが、どうやら一護は怪我以外に発熱もしているようだ。たとえは、と抱えていた一護を一護が決して手放そうとしなかった大刀と共に降ろす。そこではつと我に返った卯ノ花が一護の傍に跪いた。

「…大体の止血は済んでいるようですね」

「はい。こちらへ向かう前に粗方鬼道で塞ぎました。けれど右腕が一番酷くて…」

「いえ、これだけ塞げれば十分ですよ、朽木さん。後はこちらに任せて下さい。…どうやら発熱もしているようですし、場所を移しましょうか。」

そう言って一護を連れて奥へと移動する卯ノ花を視界から見送ると、漸く他の隊長達は動き始めた。

「朽木…どういうことだ？」

「日番谷隊長…私にも分かりませぬ。発見した時は既にあの姿だったもので…」

「あの、刀は。」

「…それも、分かりませぬ。ただ一護は決して手放そうとはしませんでしたのでそのまま持たせて来ました。」

「…斬魄刀、かねえ。」

「でも霊圧は感じられないぞ。」

浮竹の言う通りだった。

もしあれが斬魄刀ならば死神の力——しいては霊力があるはずだ。それなのにこれ程近く、実際に面と向かい合ったにも関わらず未だに一護の霊圧は感じられない。

今度はルキアも含めた5人が全く同じようにうんうん唸っているのを、近くを通り過ぎる四番隊員達が怪訝そうに見ている。…流石に隊長格ばかりなので声をかける勇者はいないようだ。

どうやら全員が相当混乱しているようだ。

5人の中で、そのことに気づいた者はいなかった。

「——まあ今ここで考えてもしょうがないか。あの様子だと暫くは目を覚まさないだろうし、僕は山じいの所に報告でもして来るよ。」

「なら俺も行く。報告書を出しに行かなきゃならねえ。」

「…わざわざ兄らが行かずとも、」

このままでは埒があかないと京楽と冬獅郎が総隊長である山本への報告を名乗り出た。

しかし今回の捜査は、六・十三番隊が主に行ってきたのだ。だから、と声をかけようとした白哉に京楽がストップをかける。

「君たちはこれから事後処理やらあるでしょ。これぐらい僕らがやるよ。ねえ日番谷くん。」

「ああ。それにこここのところ朽木はずっと外で探してたんだろ。黒崎の所に居てやれ。」

確かに白哉も浮竹もこれから報告を聞かねばならないし、ルキアは霊圧が感知されてから殆ど休まず探し続けていたのだ。ここは好意を受け取っておくべきだろう。

「…ありがとうございます。」

「いいのいいの。あ、でも一護くんが目覚めたら声かけてね。」

深々とお辞儀をするルキアに京楽は笑って返す。

「朽木、今日のお前の業務は終わりだからな。報告書は明日でいいぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「じゃあ俺達も戻ろうか。」

「ああ。」

四番隊から業務へと戻っていく隊長達を見送ると、ルキアは隊舎内へと踵を返した。

保護（後書き）

せっかく一護出てきたのに殆ど喋ってない…

うん。子供だからね！

1人疲れてクタクタだからね！

ああ…文才ってどこかに落ちてませんか？

見つけた方は是非ご一報を。

全力疾走で拾いに行きます。（真顔）

ここまで読んでいただきありがとうございました！

誤字脱字など気になる点があれば報告をもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

夢見（前書き）

区切り良くする為に今回は少し短めです…

その分次話を早めに更新できるように頑張ります！

ではどうぞ！

夢見

四番隊隊舎の奥へ入り、いくつかある治療室のどこに卯ノ花が入ったのかを近くにいた隊士に尋ねたルキアは、部屋に入ると治療の邪魔にならぬよう扉の傍の壁に身を預けた。

どうやら治療自体は既に終えているようだ。卯ノ花は隊士に病室などの指示を出している。

頃合を見計らってルキアはそちらへと近づいた。

「——卯ノ花隊長。一護は、」

「朽木さん。心配しなくて大丈夫ですよ。外傷は主に擦り傷と切り傷。右腕の怪我は何かに裂かれたようですが、大分癒え始めてましたから順調にいけば跡も残らないでしょう。…むしろ気になるのは栄養失調と発熱ですね。まあこちらは急激に治しても身体が追いつかないので徐々に回復させていく形になると思いますが。」

「そう、ですか…」

栄養失調。

流魂街出身者は空腹によるそれに悩んだことがある者が殆どだ。かく言うルキアも嘗てはそれに悩んだ口である。だからこそその苦しみが分かってしまう。

ルキアは拳を強く握りしめた。後悔と自責の念ばかりが込み上げてくる。

自分をもっと早く見つけていれば。

一護の霊圧を真っ先に感じ取ったのは自分なのに。

そんなルキアを見て、卯ノ花は固く握られたルキアの拳を自身の手

でやんわりと包んだ。

「栄養失調と言っても軽いものです。大丈夫ですよ。発熱の方も疲れから来てしまっただけです。特に異常はありませんでしたから2・3日もすれば退院できるでしょう。…それに、」

「？」

ふふと微笑む卯ノ花にルキアは疑問符を浮かべた。

「こういった疲れによる発熱が出る時は、大抵が張っていた気が緩んで安心した時なんですよ。」

一瞬きよとした表情を浮かべたルキアは傍らの診察台で眠る一護を見やる。

「そう、だと良いのですが…」
「きつとそうですよ。」

眠る一護の所々に包帯や湿布が貼られている姿は痛々しいものだったが、その寝顔は穏やかなものだった。

+++++

これは、いつの事だったか。
仲間達との別れの時。

「…そうか。」

「何だよ…怒らねえのか？」

「莫迦者。貴様が決めたことなら私達には何も言えぬわ。」

大切な、大切な仲間達との別れ。
しかし何故だろうか。その事は分かっているのに、その姿は、表情はぼやけていてよく見えない。

「そうだぜ。何でも勝手に1人で決めやがって。」

「…わりい。」

「謝んなこの馬鹿！」

「ああ!？」

「テメエがさつき自分でまた会えるつつたんだろうが！絶対に会いに来やがれ!!」

「っ!………そうだな。そんな時はきつと俺は正式な死神だ。」

「あー、死神の力持つてるっつーことはわざわざ霊術院に通う必要もねえのか。…ったく、羨ましい奴だぜ。」

「それならば私が直々に鬼道を扱いてやるぞ。何年経っても進歩の

ない奴め。」

「るせえ！あんなチマチマコントロールすんのは性に合わねえんだよ！」

皆で笑う。

そうだ。これで最後では無いのだ。

こんな時は涙も別れの言葉も似合わない。

必要なのは、たった一言。

「またな、一護。」

「忘れんじゃねえぞ。」

「……ああ、またな。——■ ■ ■、■ ■。」

これは、再会の約束。

魂に刻んだ誓い。

+ + + + + + + + + + +

「……………」

瞼を上げると、見知らぬ白い天井があった。

ここは一体何処だろうか。重い頭を横に傾け視線を巡らせば、窓から覗く夕焼け空が映る。視線を戻し自分を見下ろしてみると、清潔感溢れるベッドの上に寝かされているようだ。巻かれた包帯や腕から延びる点滴からここは病院なのだと結論付ける。

「えーっと…」

（オレ、何でこんな所にいるんだっけ？）

一護はのろのろと重い身体を持ち上げ、霞む思考を巡らせた。

（いつも通り森にいて…ああそうだ。死神のお兄ちゃんお姉ちゃんが来たんだ。それで一緒に来ないかって誘われて、いいよって言うたら怪我治してくれて…あれ？そこから覚えてないや。）

混乱する頭を落ち着けようとひとまず状況把握を試みるものの、どうやら少々記憶が抜け落ちてしまっているようだ。布団にいていうことは自分は寝てしまったのか。何やら夢を見た気もするが、どんなものだったのかということですら殆ど覚えていなかった。

（ここが病院なら、あのお姉ちゃんが連れて来てくれたのかな？えっと、確か名前って…）

「……ルキア。と、恋次。」

どこか口に馴染む響きだった。

何度かその名を口の中で転がしてみると無意識に笑みが零れる。何故だかその名を呼べるのが嬉しかった。

何だか照れくさくなって一護は再び布団に潜る。

だるく重い身体は、間をあげずに再び意識を眠りへと誘っていった。

夢見（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！

誤字脱字など気になる点があれば報告をもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

前兆（前書き）

早めになんて言っていたのにそこまで早くできなかった…（泣）
そんな中、沢山のコメント・アドバイスありがとうございます！（

感 涙 ！）

まだまだ未熟者ですので本当に有り難いです！！

今回からいただいたアドバイスを元に、少しばかり書き方を変えて
みました。読みにくいなどといった点がありましたらどうぞお気軽
にご報告下さいませ。

それではどうぞ！

前兆

「あれ？」

自分が担当する一護の病室から物音が聞こえた気がしたので花太郎は部屋を覗いてみるが、一護は相変わらず寝たままだった。しかしここに来てから下がない熱のために乗せていた冷やしたタオルが、額から無くなっている。どうやら寝返った際に落ちてしまったようだ。落ちたタオルを拾い、これが物音の原因かと結論付けた。

一昨日の夕刻頃に護廷へやって来た一護は昨日今日と眠り続けている。姿は変わってしまったが再び出会えたこと、そして自分が担当になったことに喜びを覚えた花太郎だったが、この2日間のことを考えると目が遠くなる。なにせ噂を聞きつけ休憩時間に次々と見舞いにやってくる者の殆どが隊長・副隊長という錚々たる面々だったのだ。一介の席官である花太郎が恐縮してしまうのも仕方ない。

(…しかもまさか総隊長が直々に来るなんてなあ。)

まだまだ現役であらせられる山本総隊長。その強さから四番隊に来る程の怪我を負うことなど殆ど無く、滅多なことでは来ないような方が自分の担当の部屋に来ると分かった時、同僚から憐れみの視線を向けられたことは気のせいではないはずだ。正直自分でも心臓が止まるかと思った。

そんなことをつらつらと考えながら水を換え再びタオルを冷やしてから一護の額へ乗せると、その冷たさからか一護がピクリと動きゆるゆると瞼を持ち上げた。

「あ、すみません。起こしちゃいましたか。」

「……………だ、れ…？」

ルキアの報告で身体が幼くなってしまっただけでなく記憶も無いようだとは聞いていたが、実際に面と向かって言われると矢張り寂しい。

「僕は山田花太郎と言います。一護さんの体調がまだ優れないのでここで僕が担当することになりました。よろしく願いますね。」
「……………よろしくおねがいします。」

まだ高い熱のせいか、どこか気怠そうだ。けれどきちんと身体を起こしてお辞儀をするあたり、昔に治療をした際に礼の言葉を述べてくれた彼自身と重なる。礼儀正しさは変わらないんだなぁと頬を緩めた。

「あ、そうだ。一護さん、お腹減ってませんか？2日程寝たままだったんですよ。」

「お、なか…？」

花太郎は戸惑いを隠せないでいる一護を待った。ここに着いた時、彼は寝てしまっていたという。目覚めたら知らぬ場所にいて、突然のことでまだ混乱しているのだろう。

「えっと…少し、減りました。」

「それじゃあ何か持ってきてきますね。一護さんはちょっと待ってて下さい。」

コクリと頷くのを確かめてから花太郎は部屋を出る。腹が減るということは、ちゃんと霊力があるということだ。目覚めたということも隊長に伝えなければならない。

一護が目覚めたと聞いて、これから何人ぐらいが見舞いにやってくるのだろうかと頭の隅で考えながら、花太郎はひとまず隊長室へと向かった。

驚いた。腹が減ったかと急に訊かれてつい聞き返してしまった。流魂街では他人に与える前に自分で食わねば生きていけない。そんなことを訊かれるのは久方振りのことで。しかし一護にとって腹が減っているということは時間が迫っているということ。

（こんなに早く来るなんて…）

背筋にヒヤリと汗が伝った気がした。

先程よりも頭もぼうつとする。目を閉じれば感じられる自分の中で渦巻くもの。いつもよりも強く、そしていつもよりも早くここまで大きく感じてしまうことに泣きそうになりながらも、一護は持つてきたはずの刀を探した。キョロキョロと見回せば窓枠の横に立てかけである己の半身。近くにあったことに安堵しながら、ベッドから出

てそれを強く抱きかかえる。ほつと息をつき壁にもたれてずるずると床に座り込むと、自分の内側から聞こえてくる半身の声に顔を強張らせた。

「あれ？一護さん？」

卯ノ花へ報告をしてから食事を持ってきた花太郎。一護の容態を診るために卯ノ花と、本日の業務が終わり一護の様子を見にと見舞いにやってきたルキアと恋次、そして2日前に一護が見つかったという知らせを聞いて現世よりやってきた夜一達と共に一護の病室へと来たのだが、部屋はもぬけの殻だった。花太郎が部屋を空けたのはほんの20分程度。その間に一護は一体何処に行ってしまったのだろうか。

「一護さんの刀もありませんね……」

「ふむ。そう遠くには行ってないじゃろう。探しに行くか。」

皆が了承し部屋の外へと踏み出すと、空气中微かに流れる一護の霊圧。どこか震えるような不安定さを感じる。全員がはっと顔を合わせ、そちらへと足を向けた。

「はっ、はっ、」

身体が重い。動悸が激しい。早く、早く人気の無い所へ。幸いにも今のところまだ誰にも会っていない。けれどここが病院なら沢山の人がいるはずだ。せめてこの建物からは出なければ。一護はふらふらとした足取りで隊舎の外へと赴いた。

やっとの思いで隊舎を囲む塀まで辿り着き、壁に手を置いてひとまず呼吸を落ち着けようと立ち止まる。しかし壁に背を預け、ふうと一息ついたところで急な立ち眩みに襲われた。

ドクン

「うつ、ぐ…」

思わず膝をついてしまう。ドクドクと響く心臓の音がやけに大きい。不快な音を立てる耳なりが煩い。

「一護!？」

急にいなくなっただことがバレたのか、酷く慌てた様子のルキア達が駆け寄ってくる。

（何も今来なくても…!）

その姿を視界の端で確認すると、最早間に合わないと悟る。片手を

地につきもう一方では胸元の服をぐしゃりと握る。傍らでガシヤンと落ちる半身の音がどこか遠くに聞こえる。そして苦しみで歪んでいるであろう自分の顔が、内側から聞こえてくる声により更に引きつったのがわかった。

「ダメ、だ……」

「どうしたのだ！一護！」

——もう間に合わない。

一護はこちらへ伸びる手を払いのけた。

「ダメだ！——《斬月》……！」

——嗚呼、ここには沢山の人がいるというのに。

制止の声にも関わらず出てきてしまった己の半身を確認すると、一護はこれから再び起きてしまうであろう未来への絶望と自分の中で渦巻いていたものが急激に抜けていく感覚を最後に意識を闇へと落とした。

前兆（後書き）

さーてこれだけ伏線を敷いて全て回収しきれのでしょうか？
↑
頑張ります…！

ただ今月はちょっと忙しいので更新遅めになるかもです。

ここまで読んでいただきありがとうございました！

誤字脱字など気になる点があれば報告をもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

発現（前書き）

更新遅れて申し訳ございません… 実とはある事情によりPCどころか携帯まで触れられなかったのです（泣）

最近はどうにか触る機会も増えてきたので漸くUPできました。お待ちせしました！

まだ完全復活には至らず次話の更新も遅くなってしまうかと思いますが、どうぞおつきあいよろしくお願いします。

では長い前置きはここらにして、本編をどうぞ！

発見

”一護って名前はね——”

自分と斬月（相棒）の名以外で唯一記憶に残る己の名の由来。それを知った時の胸の温かさと繋いだ手の温もりを今でも覚えている。だから、護ると決めた。

自身の手を精一杯伸ばして、自分が届くものは全部護る、と決めたのに——

+++++

「ダメだ！《斬月》——！」

確かに一護の持つ刀は斬魄刀ではないかと思った。——だがこれは一体何なのか。

一護が叫んだかと思うと、地に落とした刀から響く乾いた破裂音。

同時に姿を現す、嘗て何度も目にした一護の斬魄刀——斬月。そして膝が地につく程に重くのし掛かる霊圧。幸いにも既に業務時間を過ぎていたため殆ど隊士は残っていないが、近くにいた一般隊士は皆揃って地に伏せた。それを視認したかと思うと、一護は今にも泣きそうな程に顔を歪めて倒れてしまった。一護が気を失うとその場にいた全員が動けない程の濃い霊圧は一瞬で霧散する。後に残ったのは地に付した一般隊士と一護、霊圧の余韻で身体を固くしている自分達、そして始解させられたはずなのに再び浅打の形に戻っている斬月だけだった。

霊圧の名残から真つ先に立ち直ったのは卯ノ花だった。流石隊長格といったところか。すぐさま容態を診るために一護の身体を起こす。その間に一護の霊圧の急激な上昇に気づいたのだらう、護廷内に残っていた隊長達が続々とやってきた。隊長達が倒れる一護の容態を診る卯ノ花を見て何事かと疑問符を飛ばし始める頃、ようやくと霊圧の名残から立ち直り始めるルキア・恋次・花太郎だったが、隊長達がすぐ傍にいる光景から花太郎だけが再び身体を固くしてしまっていた。

現在ここにいるのは、ルキア・恋次・花太郎・夜一と卯ノ花・白哉・日番谷・碎蜂そして山本の隊長達。誰しもが顔に緊張を走らせていた。

「卯ノ花隊長！一護の様子は…！」

一段落ついたと思われたところでルキアが声を上げる。今の一護は、先程の霊圧が嘘であつたかのように再び一切の霊圧が感じられないのだ。

「…特に不調は見当たりません。熱も下がっているようですし、何も問題はありませんよ。今はただ眠っているだけです。」

「そう…です、か。」

「ふむ。では卯ノ花隊長。今この場で一体何があったのかを僕らにも教えてはくれまいか。」

山本のその言葉に後からやってきた隊長達も同意するような視線を向ける。

「ええ、勿論です。ですがその前に…山田五席。」

「は、はい！」

「黒崎さんを病室に。包帯なども替えなければなりません。」

「はい！分かりました！」

そうして一護を運ぼうと動き出した花太郎の横で、恋次がルキアに耳打ちをする。

「…オイ、ルキア。」

「何だ恋次？」

「お前も一護の所にいろ。話は俺と卯ノ花隊長と夜一さんがいれば十分だ。」

こんなぶっきらぼうな言い方をしているが、この幼なじみは私を、そして一護のことを心配してくれているのだ。本当ならば自分だって傍にいたいはずなのに。

「…ああ、すまぬな。」

「何、構わねえぞ。それよか一護が目エ覚めても勝手に出歩かせるんじゃないぞ。」

礼の言葉を述べるルキアに軽く返す恋次。そんな2人から少し離れた所で考え込むように立ち尽くす夜一は地に置かれている一護の刀の所まで歩を進めると、その手に取る。そしてふむ、と1つ頷くと傍らに立つ碎蜂に声をかけた。

「…のう碎蜂。1つばかり頼まれ事をしてはくれまいか。」

「は。夜一様の仰ることなら何事でも。」

「すまぬが隠密機動から転神体を1つ持ってきてほしいのじゃ。」
「構いませんが…一体何に？」

「うむ。どうやら一護は刀の名を知っておるようじゃからな。儂らはここであつたことしか分からぬが、斬魄刀（こ奴）が既に名を持つ存在ならば今までにあつたことを全部知っているかと思つての。こ奴から話が聞けるならば護廷^{ゴテ}に来る前のことも分かるじゃろ。」

「は。承りました。直ちに持つて参ります。」

そんな会話が為されている間、ルキアと花太郎によつて病室へと運ばれている一護の表情は、どこか険しいものだった。

卯ノ花が先程の霊圧に充てられた一般隊士達への処置を指示し終えると、一同は現在いる四番隊隊舎の空き部屋へと移動した。その間に一旦自隊に足を運んだ碎蜂は既にこの場に戻ってきている。どうやら指示だけ出てきたようだ。

全員が各々の場に腰を落着けると、山本が話を切り出した。

「ではもう一度訊こうかの。…一体何があつた？」

「何かと言われてもの。儂らは病室から消えた一護を探し、見つけたかと思えば一護は霊力を一瞬だけ解放させたのじゃよ。」

山本の問いに即座に返したのは夜一だった。ざっくりとした説明だが、端的に言つてしまえばそういうことである。しかしその答えはあまりに簡素すぎた為か、訳が分からないといった態で白哉と冬獅郎は眉を顰めた。そんな2人に気づいてか、卯ノ花と恋次が順を追つて説明し出す。

「ま、まず俺とルキアは今日の業務が終わり次第一護の見舞いに行こつて話してたんすよ。その途中で夜一さんに会つて。でも今日は一護の精密検査をしたつて聞いたんでとりあえず顔を見る前に卯ノ花隊長のそこに行つたんです。」

「ええ。いくつか検査をしてみましたが見受けられる点は無く、多少の熱や怪我はありましたがそれを除けば黒崎さんは至つて健康な状態でした。その旨を話していると、黒崎さんの担当をしている山田五席から黒崎さんが目覚めたとの報告が入つたのです。」

一昨日の夕刻にやってきてから刻々と眠り続けた一護。花太郎が問えばちゃんと腹は減つていたという。そのことに安堵を覚えた一行は病室へと赴くが、肝心の一護はいなくなつていた。しかしその時に、

「霊圧が感じられた？」

「はい。つて言つてもホントに微かでしたが、それでもちゃんと全員が確認しました。」

冬獅郎の問いに頷く恋次。横では夜一が腕を組みながら瞑目してい

る。

「…儂らはその霊圧を辿って一護を見つけたのだから、見つけた時には一護はあの場で跪き苦しそうに喘いでおった。その直後じゃよ。一護が斬魄刀の名を呼び霊力を解放させたのは。」

「名を、呼んだと…？」

「ああ、確かに”斬月”と。それと同時に”ダメだ”とも言っておったかの。」

「ダメ…ですか？」

「うむ。一体何に対してそう言ったのかは分からぬ。それでもその一瞬だけだがこの刀は儂らが知るあの斬月の型をとり、一護の霊圧は発せられた。…その後は再び霊圧は閉じられ斬月もこの通り浅打となってしまうたがな。」

状況は把握した。しかし残された謎に頭を捻る一同。

一護は何故子供の姿なのか、何故霊圧が感じられないのか、何故その名を知っているというのに斬月は浅打のままなのか——
深まるばかりの謎に静寂が訪れる中、不意に外から声がかかった。

「失礼します！ 碎蜂総司令官はこちらに居られますでしょうか？」

「…何事だ」

「頼まれていた物をお持ちしました！」

その言葉に視線を交わす碎蜂と夜一。他の者は何のことかと顔を見合わせていた。碎蜂が入室の許可を出すと、その隊員が持ってきたのは背丈程の大きさもある人を象ったかのような1つの道具。部屋中の視線がその道具に集まる一方で、碎蜂は二言三言交わした隊員を退出させていた。

部屋の戸が閉まり中央に横たえられた謎の道具がやけに存在感を醸し出す中、最初に口を開いたのは碎蜂だった。

「これは隠密機動が保持する”転神体”と最重要特殊霊具の1つです。こちらの中心に斬魄刀を突き刺しこの紐に繋がれた者の霊力を使用することで、斬魄刀の本体を強制的に具象化させられます。本来は卍解習得の修行時に使用するものなのですが…その持続時間が3日という短い期間の為、実際に卍解まで達した者は過去1人しかおりません」

「……いや、2人じゃな。喜助と、一護じゃ」

説明を終えた碎蜂がちらりと横に目を向けると、唸るような顔つきの夜一が口を開いた。碎蜂の説明にそんな道具があるのかと驚愕していた一同だったが、夜一の言葉には碎蜂までが驚いたようだ。

卍解を習得する際には斬魄刀の屈服が必要で、その為には斬魄刀本体を具象化させなければならない。卍解は死神の最終奥義といわれるだけあつて本来具象化を会得することですら年単位の修行が必要であり、たとえこの道具がその期間を省いたとしても屈服させることもたつた一日二日で終わるような代物ではないのだ。だから卍解習得の修行を始めたとしても数年から数十年・数百年の歳月が必要であり、下手をすれば一生習得できない者もいる。むしろそちらの方が多いだろつ。

そんなことなど分かっているはずなのに、夜一はけろりとその続きを話し始めた。

「どちらの卍解習得時にも僕はこれで立ち合っておつての。今回は一護が既に斬月の名を知っておるといふのならば、これで斬月を具象化させられるはずだと考えてたのじゃ。今の状態では一護本人に話を訊くよりこちらで訊く方がよかる。…どうであろうか、総隊長

殿？」

あたかも悪戯が成功したかのような笑みで未だ愕然とした面持ちの一同を見渡す夜一。そしてニヤリといった擬音が似合いそうな表情のまま、態とらしい口調で山本に尋ねた。その問いに対し暫し思考を巡らせた山本はあっさりと、しかし重みのある声を発した。

「そうじゃの、儂らは一体何が起きたのかを早急に知らねばならぬ。…よかるう。転神体の使用を許可する。して、この場で使用して問題はあらぬか？」

「うむ。一護の斬魄刀はこちらにあるしの。…ではゆくぞ」

夜一が転神体に繋がる紐を自身の腕に装着し、斬月をその中心へと突き立てた。

「久しいの、斬月」

「……四楓院夜一か」

転神体から吹きおこる風と共に現れたのは漆黒で身を包んだ長身の男だった。しかしいくら説明されたとしても、聞くことと実際にその目で見ることは全くの別物である。斬月本体を初めて見るということも相重なって啞然とする一同を横目に夜一は口角をつり上げ斬月へと向き合った。

「…ふむ。どうやらお主は儂らのことを覚えているようじゃな。そ

れらのことでちと尋ねたいのだが、」

「ああ、聞こえていた」

「ほう。それならば話は早いの」

いきなり現れた斬月と夜のテンポよく会話をなす光景に目を白黒させつつも、会話が途切れ斬月が辺りを見回すや否や部屋は緊張した面持ちに包まれた。ごくろ、と喉を鳴らしたのは一体誰だろうか。一斉に集まる真剣な眼差しを肌で感じ一旦目を伏せた斬月は、再び目を開くと共に話を切り出した。

発現（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！

誤字脱字など気になる点があれば報告をもらえるとありがたいです。

感想もいただけると泣いて喜びます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3252w/>

披荊斬棘 - ヒケイザンキョク -

2012年1月4日13時50分発行